



京大広報

No. 586

2004. 1

目次

新しい年を迎えて 〈大学の動き〉	総長 尾池和夫……1602	〈部局の動き〉 基礎物理学研究所 創立50周年記念式典を挙……1616
第6回運営諮問会議の開催……1604		〈寸言〉 気概とたしなみ 安部浩平……1617
百周年時計台記念館が竣工……1606		〈随想〉 京都大学を想う 名誉教授 志田忠正……1618
尾池和夫副学長 第24代総長に就任……1607		〈洛書〉 「上海センター」に、職員組合に 大西 広……1620
副学長の交替等……1607		〈訃報〉……1621
高等教育研究開発推進機構長の交替……1608		〈お知らせ〉 総合博物館展示会のご案内……1622
総長補佐の交替等……1608		京都大学21世紀 COE「知識社会基盤構築の ための情報学拠点形成」の成果報告と 第1回国際会議……1623
部局長の交替……1608		〈日誌〉……1623
長尾総長のアメリカ合衆国訪問……1609		〈医療技術短期大学の動き〉 恒例の消防訓練を実施……1624
ミンガン大学との学术交流……1609		〈編集後記〉……1624
ハワイ大学との学术交流……1610		
人権に関する研修会の開催……1610		
新年名刺交換会……1610		
自衛消防団員に感謝状……1611		
事務局消防訓練・ 年末特別消防演習を実施……1611		
平成15年度定年退職教官……1612		



新装なった百周年時計台記念館
—関連記事 本文1606 ページ—

京都大学広報委員会

<http://www.kyoto-u.ac.jp/>

新しい年を迎えて

総長 尾池 和夫

皆様、明けましておめでとうございます。

昨年は長尾前総長の輝かしい仕事の成果としてさまざまな進展がありました。医学部保健学科が置かれ、高等教育研究開発推進機構が発足し、フィールド科学教育研究センターができ、桂キャンパスで講義が始まるなど、多くのことがありました。学内措置で設置されていた福井謙一記念研究センターは、平成15年度予算成立に伴い省令施設の基礎化学研究センターとして設置されました。21世紀COEでは、合計22の拠点が形成されました。また、特色ある大学教育支援プログラムでも1つの課題が走っています。新しいレストランの開店も、百周年時計台記念館の竣工も忘れられない出来事になりました。知的財産企画室がベンチャー・ビジネス・ラボラトリー内に設置されました。また、入学資格の改訂を行い、在日外国人などの民族学校出身者に受験資格を認めることもできました。さらに、飛騨天文台の太陽磁場活動望遠鏡披露式が開催されました。

今年は、4月1日に、国立大学法人京都大学が設置され、その法人が京都大学を設置するということが法律で決まっています。また、法科大学院がスタートし、東南アジア研究センターが研究所として装いを新たにし、生存圏研究所を作るというような、いくつかの重要な計画を持っています。

総長に就任して初めての新年を迎えました。年の初めの挨拶をさせていただくのは名誉なことであり、緊張することでもあります。総長就任にあたっての、私の基本的な考え方の一部を申し上げて、ご批判を仰ぎ、また、ご指導を賜りたいと存じます。

第一に、自由の学風を継承し発展させ、“自学自習を基本とするという大原則”を、あらためて肝に銘じておきたいと思います。この方針を貫いていくためには、今年迎える国立大学法人化も、この大原則を守り発展させるために役立つこともありますが、ときにはその伝統を守るための妨げになる可能性もあると思います。

今年4月1日には、私は新しく設置される京都大学の総長に指名されることになっています。法人法の趣旨によって、リーダーシップを発揮するよう求め



られているわけですが、京都大学では、ボトムアップによる企画をもとにするリーダーシップを基本方針としたいと思います。部局の自治を基礎とする京都大学の伝統には、107年の歴史の中で築かれ

てきた、学問の自治があります。部局長会議での議論をもとに、さまざまなことを考えていく運営方法を大切にしなければなりません。

法人化にあたっては個性輝く大学を目指してと言われていますが、一般的に競争原理を不用意に導入しますと、一つの目標に向かって全員が走り出して、結果的には個性を殺してしまうことになるという原理が働きます。このことは、競争の結果がどのように評価されるかということに深く関わりがあります。

学問の評価は、それぞれの学問の分野を究めた研究者によらなければ難しいという面があります。大学の評価は大学でなければできない面があります。自己評価をきちんとすることができる必要があると思います。そのため大学評価の京都大学方式を確立するための、評価方式の分析と独自の検討を進めたいと思っています。

また、社会の評価をしっかりと得るためには、大学の中身を詳しく、正確に、迅速に、社会に見せる努力が大学の側に必要です。そのためには広報の機能を大幅に充実することが必須の条件であります。大学を市民に理解してもらうことが重要です。市民にわかる言葉で、市民に理解してもらって、はじめて研究の成果が生きてくると思います。

つぎに、私は、地球社会の調和ある共存という、

京都大学の基本理念にもある課題が重要だと思っています。総合大学として、多様な研究の発展をはかり、開かれた大学としてその研究成果を社会に還元することが京都大学の役目です。そのためには、世界から有能な人材をしっかりと確保しつつ、何よりも人類の住む地球のことをよく知って、その地球と人類の共生を目的とする研究に取り組むことが大切と思っています。

そのことを基本としつつ、総合大学としてあらゆる分野の学問を発展させていくことが重要ですが、京都大学は諸先輩方のご努力の蓄積が十分にある大学であります。その伝統を法人化という荒波から守り抜くのが、私に与えられた仕事であろうと思います。

学問の手法には、理論研究の分野、実験研究の分野、野外研究の分野があり、それらが融合して研究成果を確実なものにしていきます。その成果を蓄積しながら、社会に還元するのが京都大学の役目です。それによって、地域社会、国際社会への貢献ができます。その結果、京都大学に対する評価は自ずから与えられると思います。

大学運営の中で、日本学術会議の存在もさらに意識していかなければならないと思います。日本学術会議の役割は、非政府組織、すなわちNGOとしての役割にあります。政府から独立して、純粋に学者の立場から学問の領域に関する将来計画を議論することのできる貴重な組織です。学術会議では、例えば、2003年7月15日に、「国立大学法人化と大学附置共同利用研究所等のあり方について」という要望を出しています。大学の法人化で、各大学の独自の理念による運営が、ときには、全国共同利用の研究所の運営と相容れない面を持つことが懸念されるのであります。大学も国の予算が支出されながら、政府からは独立して将来が議論されないとはいけません。その根本を保障する考え方がしっかりと根付いてこそ、大学を支える文部科学省と大学とのパートナーシップが成り立つと言えるのです。

研究成果の社会への伝達と還元のもっとも基本が学生の教育です。京都大学は、日本人学生、社会人、外国人留学生、在日外国人学生など、あらゆる人々に、均等の機会を用意する義務があると思います。国際的視野と均衡感覚をそなえた人材の育成を目指

して、学問に熱意を持つ人材を受け入れて、学習と研究の場を用意し、発展させていきたいと思っています。そのひとつとして、安全なキャンパスを構築するという具体的な目標を置きました。学生にとって安全なキャンパスであるための基本方策を検討していただくなかで、一つの行動として、夜中にパトロールカーの赤ランプを回転させながら構内を巡回してその効果を見ております。

質の高い医療サービスも、研究成果を生かした社会貢献の大きな分野であります。またネットワークによるサービスも重要です。これらをいかに発展させていくかが課題の一つです。例えば、京都大学医学部附属病院で、患者にとって快適な医療環境を保ち発展させることなど、多くの課題があります。今年には医師の新研修制度が始まる年でもあります。

京都盆地にある三つのキャンパスを中心とする京都大学は、京都盆地に生まれ育った京都の文化を大切にし、その発展に貢献する課題をもっています。地域の文化を守り、その発展に貢献することを大切にすることも基本方針です。最もローカルなものこそ、最もグローバルなものであると、私は思っています。京都の文化がその実例です。京都は世界の人が知っています。その優位さを生かして、世界に向かって文化を発信していかなければなりません。そのためには大学コンソーシアム京都などの取り組みにも、より積極的に参加していくことが必要だと思っています。

京都大学教育研究振興財団をはじめ、多くの財団や市民からの寄付が、これからの京都大学の活動を支えています。同窓会組織の連帯と育成をはかるのも、今後の大きな課題の一つです。その点に関しても、皆様のご理解とご協力を、こちらからお願いしたいと思います。総長室のホームページにメッセージを掲載し、そこから総長室へ直接、電子メールが送れるようにしました。すぐに返事を差し上げることは時間的にかないませんが、一つひとつのメールに目を通しながら、さまざまな見方を知りよりどころとさせていただいております。

新年が、皆様方にとって、よい年であることを願って、年始の私の挨拶といたします。

大学の動き

第6回運営諮問会議の開催

第6回運営諮問会議が平成15年2月7日（金）に本部事務局棟特別会議室において井村裕夫委員長，石井米雄委員，伊東光晴委員，大南正瑛委員，大西正文委員，興膳 宏委員，竹内佐和子委員，野依良治委員の出席のもと，開催された。

なお，運営諮問会議の目的及び委員の氏名については，ホームページ（<http://www.kyoto-u.ac.jp/Official/committee/simon/simonkaigi.htm>）に掲載している。

主な意見

【京都大学の現状について】

- 京都大学が大学院大学を目指すとした場合，現存している教員スタッフ数や施設条件等から見て，現在の博士課程入学者数が適正な規模の数値であると考えているのか。

Ph.Dの学位を多く取得させるという観点から見ればまだ不十分である。国策としてももう少し増やしても良いのでないか。

- Ph.D取得者を増やす点については，学術研究面からの有用性の面もあるが，研究者のマーケットにおける需給関係も考慮する必要がある。新しい大学院研究科を設置するにあたり，このことも視野に入れておかなければいけない。必ずしもドクターを増やすべき分野ばかりではなく，マスターを必要としている企業もあると思う。

- 京都大学の先生方は教養教育，専門教育，大学院教育も全て行っているが，法人化を睨んだ場合，もう少し大学院教育にシフトしても良い。相対的にPh.Dの取得者を増やそうという数値目標を持つことも一つの視点だと思う。

- 日本では，大学院は研究者を育成するのか専門職を育成するのかが曖昧なままで現在まで来てしまっている。この両者は教育目標やカリキュラムも当然違うはずであり，今後これをどう区分し整理するかが重要である。

- 科学研究費補助金について，日本ではどれくらいの研究費を獲得したのかという点のみが先行してしまい，どのような研究成果をあげたのか，どれくらい社会に還元されたのかという一番重要な点がおろそかになっている。京都大学においては，研究内容のアウトプットについての議論を進めていただきたい。

【法人化に向けた京都大学の課題について】

- 評価の問題であるが，先行独法では毎年，単年度評価を受けることとなっており，この対応に相当のエネルギーが費やされ疲労困憊している。国立大学法人も同様になるとしたら教育研究にかなりの影響が出ることとなる。評価栄えて学問減ぶということにもなりかねない。





- 各大学が自己点検・自己評価を行うことは当然であり、これは構わないとしても、外部評価を毎年行うというのは評価の過剰であり必要ないと思う。6年の中期目標・計画期間のうち1回ぐらいで充分なのでないか。このことは大学としても強く抵抗したほうが良い。
 - 法人化により大学の自由度が増すよう努力して欲しい。投資決定権を大学自身が持つ必要があると思う。国鉄は民営化したが、新幹線の設置等は国会で決まる。民間でこのようなことは有り得ないと思う。
 - 法人化にあたり、大学法人自身がどのようなアイデアを出し、如何にこれを実現させるかが重要である。そのためには役員会に対し、経営協議会や教育研究評議会がどういった有効な支援をするか、あるいはどれくらい公正なチェック機能を持つかが重要な鍵になると思う。
 - 本学（私学）では「教職協働」を実施している。これは教育研究、社会貢献など様々の分野において、教員と職員がお互いの立場を尊重しながら相乗的に協働していくというものであり、私学の経験からいえばこのことが極めて大切である。今後、国立大学も法人化に向けて職員の立場が非常に重要になる。産官学連携、地域連携などは教員と職員が一緒に対応することが長続きする秘訣である。
- そのためにはこれまでの事務職員という包括したものでなく、教育支援職員，研究支援職員，行政職員などというカテゴリーが必要となると思う。
- 法人化に向けて京都大学が一丸となって改革していこうという意識をもつことが重要である。企業の場合で、何か大きなプロジェクトを行う際には、末端の社員まで全員が同じ意識・目的の基に邁進しないと必ず失敗してしまう。法人化になることで必ずしも良いところばかりであるとは言えないと思うが、メリットの面はどんどん吸収し、大学の教職員全体で同じ意識の基により良いものを作っていたきたい。
 - 法人化になると、例えば勤務時間、兼職・兼業など様々な事柄について、従来と違い大学が如何に管理し運営して行くのが問題になる。そうなるとうち全体としての方針を持った運営も大事だが、やはり各学部の運営をどうするかも大事である。法人化後における学部長の権限、学部教授会の在り方等をどう位置付けるかの検討を行う必要があると思う。法案の中身を見ても大まかなことしか決めておらず、あとの細部については大学に任せられている形となっている。法人化するということを契機として大学が自主性をもって新しい発展ができるよう、それぞれの大学が仕組みを作り上げていく必要がある。残された時間はあまりないが、その中でも十分に検討し是非良い制度を作り上げていただきたい。

百周年時計台記念館が竣工

京都大学のシンボリックな存在として親しまれてきた時計台が、平成14年5月からの改修工事を終え、百周年時計台記念館として12月15日（月）リニューアルオープンした。

時計台は、ゼツェッション様式の極めて格調の高い風格を備えた、歴史的にも貴重な建物であり、設計は本学建築学科初代教授の武田五一氏が担当し、大正14年に完成したもので、以来80年近くにわたり京都大学を見守ってきた。このほど財団法人京都大学教育研究振興財団の助成を受け創立百周年記念事業の一つとして、学術交流、情報発信の場となるべく再生されたものである。

新しい時計台記念館は地下1階、地上2階建RC構造で、再生にあたっては外観や内部意匠の改変を極力抑え、建設当時の面影を残しながら、最新の免震構法を取り入れることにより、耐震性能を大幅に向上させるなど、伝統を受け継ぐとともに新しい技術、機能を積極的に取り入れている。

時計塔北側の法経第一教室跡に新設された百周年記念ホールは、地下1階、地上2階建SRC造りで、500名収容可能な、同時通訳装置を備えた国際学会の開催にふさわしい大ホールである。このほか300名収容の国際交流ホール、京大サロン、大学文書館、展示ホール、会議室などが設けられている。

12月15日のオープンに先立ち時計台記念館の竣工式典、祝賀会が、12月13日（土）午前11時から同記念館において約300人の学内外の関係者の参加を得て開催された。

竣工式典は、長尾 真総長をはじめ関係者による



1939年当時の本部構内の精巧な模型がある展示ホール



竣工式典で挨拶する長尾総長

同記念館正面玄関前でのテープカットで華やかに始まった。百周年記念ホールへ異動した後、長尾総長から、新しい時計台を学術交流と社会への情報発信の場として京大の新たな活動を展開していきたいと挨拶があり、また、時計台の再生・保存が可能となったことは、財団法人京都大学教育研究振興財団をはじめ多くの方々のご支援によるものと感謝を述べた。続いて、井村裕夫前総長、萩原久和文部科学省文教施設部長、佐村知子京都府副知事、高木壽一京都市副市長が祝辞を述べられた。

続いて行われた施設見学では、見事に復元・再生された意匠や地下免震ピットにある最新の免震装置、百年余にわたる京都大学の歴史を紹介した展示ホールなどを詳しい説明を聞きながら見学した。

最後に国際交流ホールにて行われた祝賀会では、長尾総長の挨拶の後、盛大な鏡開きが行われ、岡本道雄元総長による時計台の思い出を交えた乾杯の発声の後、和やかに祝賀会が行われ、新たなスタートを切った時計台記念館の再生を祝った。



最新の免震装置がある地下免震ピット

尾池和夫副学長 第24代総長に就任



総長交代式で就任挨拶を述べる尾池総長

12月16日、長尾 真総長の任期満了に伴い、尾池和夫副学長（理学研究科教授）が本学第24代総長に就任した。

総長就任式は、12月17日（水）午前9時30分から本部事務局棟大会議室において、事務局、附属図書館の職員が出席して行われた。

尾池総長は就任挨拶の中で「大学において大事なものは学生である。有能な人材を広く世界から受け入れるとともに、学生が安心して学習に励むことのできる安全で快適なキャンパスを作ることに努力したい。また、自由の学風の伝統を継承し、学問の自由の確立に貢献すること、基礎研究を重視し、人類の未来のために教育と研究に取り組みたい。」と新総長としての決意と抱負を述べた。

さらに、総長交代式が同22日（月）午前11時から新装なった百周年時計台記念館国際交流ホールにお

いて、沢田敏男元総長、西島安則元総長を迎え、金田章裕副学長、東山紘久副学長、塩田浩平総長補佐、入倉孝次郎総長補佐、辻 文三総長補佐、各部局長をはじめ教職員約150名の参加を得て行われた。総長交代式では、教職員を代表して笠原三紀夫エネルギー科学研究科長から送迎のことばが述べられた後、長尾前総長、尾池総長からそれぞれ挨拶があった。

（総長室のホームページ：http://www.adm.kyoto-u.ac.jp/Official/24_soucho/f_soucho.htm）

なお、これに先立ち、12月15日（月）15時30分から長尾総長の退任式が本部事務局棟大会議室において事務局、附属図書館の職員が出席し行われた。退任式では長尾総長から退任挨拶の後、本間政雄事務局局長から送辞が述べられた。その後、長尾総長は本部事務局棟玄関前で、集まった教職員約300名からの大きな拍手の中、京都大学に別れを告げた。



事務局棟玄関前で握手を交わす新旧総長

副学長の交替等

（新任）

東山副学長

東山紘久教育学研究科附属臨床教育実践研究センター教授（臨床心理実践学講座担当（心理臨床学））が、尾池和夫副学長の任期満了に伴う後任として、平成15年12月16日付で任命された。任期は平成16年3月31日まで。



（再任）

金田副学長

金田章裕文学研究科教授（行動文化学専攻地理学講座担当（地理学））が、平成15年12月16日付で再任された。任期は平成16年3月31日まで。

高等教育研究開発推進機構長の交替 (新任)

丸山高等教育研究開発推進機構長

丸山正樹理学研究科教授（数学・数理解析専攻多様体論講座担当(代数幾何学)）が、赤岡 功高等教育研究開発推進機構長の後任として、平成15年12月16日付けで同機構長に委嘱された。任期は平成17年12月15日まで。



総長補佐の交替等 (新任)

入倉孝次郎総長補佐

入倉孝次郎防災研究所教授（地震災害研究部門担当（強震動地震学））が、西本清一総長補佐の任期満了に伴う後任として、平成15年12月16日付けで任命された。任期は平成16年3月31日まで。



(新任)

辻 文三総長補佐

辻 文三工学研究科教授（都市環境工学専攻環境材料学講座担当（環境構成材料学））が、森本 滋総長補佐の任期満了に伴う後任として、平成15年12月16日付けで任命された。任期は平成16年3月31日まで。



(再任)

塩田浩平総長補佐

塩田浩平医学研究科教授（生理系専攻生体構造医学講座担当（形態形成機構学））が、平成15年12月16日付けで総長補佐に再任された。任期は平成16年3月31日まで。

部局長の交替 (新任)

教育学研究科長・教育学部長

藤原勝紀教育学研究科附属臨床教育実践研究センター教授（臨床心理実践学講座担当（臨床心理学））が、東山紘久教育学研究科長・教育学部長の辞任に伴う後任として、平成15年12月16日付けで任命された。任期は平成17年3月31日まで。



工学研究科長・工学部長

荒木光彦工学研究科教授（電気工学専攻複合システム論講座担当（複合システム論））が、辻 文三工学研究科長・工学部長の任期満了に伴う後任として、平成15年12月16日付けで任命された。任期は平成17年12月15日まで。



(新任)

高等教育研究開発推進センター長

丸山正樹理学研究科教授（数学・数理解析専攻多様体論講座担当(代数幾何学)）が、赤岡 功高等教育研究開発推進センター長の後任として、平成15年12月16日付けで任命された。任期は平成17年12月15日まで。



長尾総長のアメリカ合衆国訪問

長尾 真総長は、12月5日から12月9日までアメリカ合衆国を訪問した。今回の出張では、ミシガン大学において、同大学との「学術交流に関する一般的覚書」を交換した。また、引続き同大学心理学部において行われた「第4回京都大学国際シンポジウム－自己・認知・情動：心理学研究の未来に向けて－」に出席した。



ミシガン大学学長、副学長らと懇談する長尾総長

ミシガン大学との学術交流



ミシガン大学 Mary Sue Coleman 学長と「学術交流に関する一般的覚書」を交換する長尾総長

本学とアメリカ合衆国のミシガン大学は、大学間学術交流協定の締結について協議を重ねてきたが、この度本学と同大学の教育・研究の交流と協力を推進するための「学術交流に関する一般的覚書」を交換した。

ミシガン大学との覚書は、長尾 真総長とミシガン大学 Mary Sue Coleman 学長の署名により、平成15（2003）年12月5日に交換された。

同大学は1817年に創立された商学部・法学部・教育学部・文学部・工学部・医学部・薬学部等の17学部、および社会学・日本研究・遺伝学・情報学等の27の研究所を有する総合大学。教員数は4,200人。学生は37,200人。同大学のホームページは〈<http://www.umich.edu>〉。

ハワイ大学との学術交流

本学とアメリカ合衆国のハワイ大学は、大学間学術交流協定の締結について協議を重ねてきたが、このたび本学と同大学の教育・研究の交流と協力を推進するための「学術交流に関する一般的覚書」を交換した。

ハワイ大学との覚書は、長尾 真総長とハワイ大学 Evan S. Dobbelle 学長の署名により、平成15

(2003)年11月13日に交換された。

同大学は1907年に創立された人文科学部・農学部・自然科学部・教育学部・工学部等の11学部、および法学・海洋学・医学・建築学等の大学院8専攻を有する総合大学。教員数は3,300人。学生は44,600人。同大学のホームページは〈<http://www.hawaii.edu>〉。

人権に関する研修会の開催

12月5日(金)午後3時から、附属図書館AVホールにおいて、「人権週間に因む研修会」が開催され、片柳榮一同和・人権問題委員会委員長の開会の辞、金田章裕副学長のあいさつの後、2時間にわたり、本学教職員及び学生約80人が熱心に聴講した。

本研修会は、学内外から講師を迎え、本学教職員・学生を対象として同和・人権問題の啓発を図る目的で、毎年、春と秋に2回開催している。今回は、たんぼぼ総法律事務所の丹羽雅雄弁護士を講師に迎え、民族問題に関して、これまでの経緯や今後の課

題について「多民族・多文化共生社会と在日外国人の人権」というテーマで講演が行われた。



講演する丹羽弁護士

新年名刺交換会

本学恒例の新年名刺交換会が、1月5日(月)午前10時から昨年12月に竣工したばかりの百周年時計台記念館国際交流ホールにおいて、尾池和夫総長をはじめ沢田敏男元総長、井村裕夫元総長、長尾 真前総長、金田章裕副学長、東山紘久副学長、塩田浩平総長補佐、入倉孝次郎総長補佐、辻 文三総長補佐、各部局長及び名誉教授、教職員約250名が出席して盛大に行われた。

はじめに尾池総長から就任後初めての新年の挨拶があり、次いで沢田元総長の発声による乾杯で新年を祝った。和やかな歓談ののち午前11時に散会した。



自衛消防団員に感謝状

12月25日（木）午前11時から本部事務局棟大会議室において、自衛消防団員に対して総長からの感謝状及び記念品が本間政雄事務局長より贈呈された。

感謝状を受けた団員は、辻本和夫（経理部）、池田達志（総務部）、瀧本 健（工学部）、塚常正博（エネ理）、増田 開（エネ理）、増池正和（理学部）、吉川正紀（施設部）の各氏である。

なお、当日午後4時から自衛消防団による演習が行われ、日頃の訓練成果が披露された。



自衛消防団とは…

京都大学自衛消防団は昭和26年に組織され、現在、主に吉田地区附近に居住する24名の職員が団員として総長の委嘱を受けている。

本消防団は、本学における教育・研究活動が円滑に行われるよう、火災が発生した場合において消火、延焼の防止等にあたるため、訓練の実施、消防自動



車（ポンプ車）の保有など、消防力の充実に努めており、また、左京自衛消防連絡協議会の一員として訓練大会への参加、京都市消防出初式への参加、京都市が実施する防災研修への参加、年末の特別演習（くす玉割り）等の活動も行っている。

委嘱期間5年ごとに団員には総長から感謝状及び記念品が贈呈される。

なお、本消防団は本学職員約30名で組織することになっており、現在、団員になっていただける職員を募集している。（団員募集のお問い合わせ先：経理部管財課第二管財掛）

事務局消防訓練・年末特別消防演習を実施

12月25日（木）に事務局消防計画に基づく事務局職員の総合消防訓練が午後3時から約20分間にわたり左京消防署の指導と協力を得て行われた。

訓練は、本部事務局棟5階大会議室からの出火を想定し「訓練火事です」との通報により始まり、左京消防署の消防車3台が出動し、総勢150名の参加



のもと通報連絡、初期消火、避難誘導、物品搬出、警備誘導、救護等の一連の総合訓練が行われ、その後、左京消防署員の指導のもと消火器放射訓練が行われた。

また、同日午後4時から本部地区自衛消防団による恒例の年末特別消防演習が実施され、消防車及び屋外消火栓による放水訓練が行われた。

なお、各部署等においても、次のとおり実施された。

月 日	実施 部 局 名 等
10. 17 (金)	原子炉実験所
11. 25 (火)	医療技術短期大学部
12. 12 (金)	生態学研究センター
12. 17 (水)	医学部附属病院
12. 17 (水)	宇治地区研究所
12. 19 (金)	薬学部
12. 24 (水)	文学部, 教育学部, 法学部, 経済学部
12. 25 (木)	北部構内

平成15年度定年退職教官

京都大学教員定年規程により、次の教官（教授59名、助教授4名、講師1名、助手14名）が、本年3月31日付けで退職の予定である。

部 局	氏 名	講 座 等	研 究 分 野 等
法 学 研 究 科	前 田 達 明	民刑事法専攻 民事法講座	民事法の研究。法典調査会の議論を中心として、立法者意思の確定研究。帰責論。
経 済 学 研 究 科	中 野 一 新	経済動態分析専攻 比較制度・政策講座	多国籍アグリビジネスに関する研究
理 学 研 究 科	河 野 敬 雄	数学・数理解析専攻 基礎数理講座	正規確率過程の見本関数に関する研究
〃	藏 本 由 紀	物理学・宇宙物理学専攻 非線形物理学講座	動的非線形現象の理論的研究を、数理的および数値解析的手法の両面から行う。
〃	藪 崎 努	物理学・宇宙物理学専攻 量子光学講座	量子光学，原子物理学に関する研究
〃	鷺 田 伸 明	化学専攻 物理化学講座	気相フリーラジカルの反応（速度と機構）および分光の研究とその応用としての大気化学反応の研究
〃	山 本 直 一	化学専攻 無機化学講座	水溶液を反応場とする遷移金属酸化物の合成と特性評価
〃	西 田 利 貞	生物科学専攻 人類学講座	人類進化論，特にチンパンジーの生態，行動，社会の研究
〃	宮 田 隆	生物科学専攻 機能統合学講座	分子進化学：生物の多様性と遺伝子の多様性との関連に関する研究及び分子に基づく生物の系統進化の研究
〃	由 佐 悠 紀	附属地球熱学研究施設	地熱流体の生成と流動に関する研究
〃	宮 地 英 紀	物理学・宇宙物理学専攻 物質物理学講座	高分子の構造と物性に関する研究
医 学 研 究 科	日 合 弘	病理系専攻 基礎病態学講座	疾患の遺伝的基盤に関する実験病理学的・生物学的研究
〃	飯 塚 忠 彦	外科系専攻 感覚運動系外科学講座	顎関節症の病態生理学的研究。顎顔面変形症の外科的治療に関する研究。骨形成蛋白の研究。
〃	今 村 正 之	分子医学系専攻 分子外科学講座	消化器癌，特に食道癌，膵癌，膵内分泌腫瘍の基礎的研究に基づく早期診断と外科的治療法の開発の研究
医 学 部	田 原 明 夫	保健学科 作業療法学専攻	精神障害リハビリテーション領域での行動評価尺度Rehabの適用，集団精神療法，患者の人権擁護等の研究
医 学 研 究 科	菅 原 建 二	病理系専攻 感染・免疫学講座	ウイルスの発がん機構に関する分子生物学的研究
医 学 部	中 村 紀 士 子	保健学科 検査技術科学専攻	造血幹細胞におけるサイトカインの影響についての研究
医学部附属病院	加 藤 典 子	探索医療センター 探索医療臨床部	臨床心理学

部 局	氏 名	講 座 等	研 究 分 野 等
薬学 研究科	佐藤 公道	生命薬科学専攻 生体機能薬学講座	鎮痛薬に関する神経薬理学的研究。疼痛・疼痛反応の成立・制御機構に関する分子神経科学的研究。
工学 研究科	花崎 紘一	社会基盤工学専攻 地殻工学講座	爆破現象の応用に関する研究。非破壊検査に関する研究。ワイヤロープに関する研究。
〃	辻 文三	都市環境工学専攻 環境材料学講座	材料としての鋼とコンクリートの力学挙動と構造物挙動の相関や材料と構造システムの地球環境負荷問題の研究
〃	垣野 義昭	精密工学専攻 知能機械システム講座	工作機械, 精密加工, 計測制御, 知能化加工システムに関する研究
〃	今西 信嗣	原子核工学専攻 量子ビーム科学講座	量子ビームと物質との相互作用とその応用, 量子ビームの発生と計測, ならびに原子核反応と構造に関する研究
〃	足立 裕彦	材料工学専攻 材料設計工学講座	量子論による金属およびセラミックスの材料設計に関する研究
〃	山口 正治	材料工学専攻 材料物性学講座	金属間化合物の格子欠陥と結晶塑性に関する研究
〃	川原 琢治	航空宇宙工学専攻 航空宇宙基礎工学講座	連続体および格子における非線形波動現象の動力学的研究
〃	牟田 一彌	電気工学専攻 電磁工学講座	応用超伝導工学, 超伝導電力機器, 電気機器, パワーエレクトロニクス, ファジィ制御, 感性工学
〃	奥村 浩士	電気工学専攻 電気システム論講座	電気電子回路, 分布定数回路システムの解析法, ヒステリシス特性のモデル化, 雷サージ現象, 非線形振動解析
〃	植村 榮	物質エネルギー化学専攻 触媒科学講座	有機合成化学に有効な均一及び固体触媒の開発に関する研究
〃	森島 績	分子工学専攻 分子設計学講座	ヘム蛋白質など金属酵素蛋白質の機能制御に関する分子工学的研究
〃	船引 卓三	分子工学専攻 物性物理化学講座	金属酵素の触媒機能発現に関する錯体触媒化学的研究
〃	齋藤 烈	合成・生物化学専攻 生物化学講座	生物有機化学分野。ゲノム化学および核酸有機化学に関する研究。
〃	倉光 正己	電気工学専攻 複合システム論講座	非線系システム, 複雑系
〃	西田 薫	都市環境工学専攻 環境衛生学講座	都市域における大気環境の環境影響評価手法に関する研究
〃	山本 穰	機械工学専攻 機械設計制御工学講座	静圧気体軸受および非接触気体シールに関する研究。メカトロニクスに関する研究。
〃	吉田 紘二	附属量子理工学 研究実験センター	イオン加速器を用いた微量元素分析技術の開発と研究
農学 研究科	天野 高久	農学専攻 耕地生態科学講座	東アジアのファーミングシステムに関する研究
〃	森 友彦	農学専攻 品質科学講座	食料の品質と受諾性の主要因の風味と食感に関する分析手法, 構造機能相関, 感覚メカニズムの研究
〃	桑原 保正	応用生命科学専攻 応用生化学講座	昆虫, ダニ, ヤスデ等節足動物門の性・集合・警報フェロモンを中心とした天然物化学及び化学生態学的研究

部 局	氏 名	講 座 等	研 究 分 野 等
農 学 研 究 科	宮 本 元	応用生物科学専攻 動物機能開発学講座	哺乳動物の生殖器官及び配偶子の高度化利用に関する研究
〃	内 田 有 恆	応用生物科学専攻 海洋微生物学講座	海洋分子微生物学に関する研究：特に、食品腐敗細菌、微細藻類及び好熱細菌の生理・生化学的研究
〃	小 川 正	食品生物科学専攻 食品健康科学講座	食物アレルギーに関する基礎的研究及び低アレルギー食品の開発並びに抗アレルギー食生活の為の応用研究
〃	古 川 良 茂	附属農場	果樹類の整枝剪定技術とその生産性に関する研究
人 間 ・ 環 境 学 研 究 科	西 本 美 彦	共生人間学専攻 言語科学講座	ドイツ語、インド・ゲルマン語を対象とした統語論・意味論・語彙論に関する研究
〃	池 田 浩 士	共生文明学専攻 現代文明論講座	ナチス・ドイツ、天皇制下の日本など、ファシズム社会における文化、とりわけ大衆文化に関する研究
〃	村 形 明 子	共生文明学専攻 比較文明論講座	フェノロサを中心とする近代東西文化交渉の諸相に関する比較文化的研究
〃	宮 崎 興 二	共生文明学専攻 文化・地域環境論講座	高次元多胞体の建築計画的応用に関する研究
〃	松 原 孝 治	相関環境学専攻 物質相関論講座	固体微小粒子中の電子の挙動に関する光物性化学的研究
〃	大 島 トキ子	相関環境学専攻 物質相関論講座	絶縁体・半導体結晶に於ける分光学的研究
エ ネ ル ギ ー 科 学 研 究 科	吉 田 起 國	エネルギー基礎科学専攻 エネルギー反応学講座	量子エネルギープロセス分野、固体物性学
〃	伊 藤 靖 彦	エネルギー基礎科学専攻 エネルギー反応学講座	エネルギー化学分野
ア ジ ア ・ ア フ リ カ 地 域 研 究 研 究 科	田 中 二 郎	アフリカ地域研究専攻 民族共生論講座	アフリカにおける少数民族社会の変容過程に関する地域研究
〃	小 山 直 樹	アフリカ地域研究専攻 地域動態論講座	アフリカ地域の動物相と環境保全に関する研究
情 報 学 研 究 科	茨 木 俊 秀	数理工学専攻 応用数学講座	離散アルゴリズムおよび最適化に関する研究
〃	足 立 紀 彦	システム科学専攻 システム構成論講座	システム理論、機械システム制御に関する研究
生 命 科 学 研 究 科	熊 谷 英 彦	統合生命科学専攻 応用生物機構学講座	微生物の生命現象の遺伝子、タンパク質、細胞レベルでの解析研究とその応用研究
化 学 研 究 所	上 田 國 寛	生体反応設計研究部門	ポリ(ADP-リボース)の代謝と機能、神経変性疾患の発症機構の研究、遺伝子診断法の開発研究
〃	松 木 征 史	附属原子核科学研究施設	宇宙由来素粒子と高励起原子に関する研究
人 文 科 学 研 究 所	井 狩 彌 介	文化研究創成研究部門	古代インド・ヴェーダ文献の歴史的研究と、ヴェーダ祭式の構造・その歴史的研究
〃	山 本 有 造	文化研究創成研究部門	近代日本の数量経済史的研究

部 局	氏 名	講 座 等	研 究 分 野 等
人文科学研究所	佐々木 克	文化生成研究部門	明治維新期における「政治文化」の研究
再生医科学 研 究 所	清水 慶彦	再生医学応用研究部門	再生医学・組織工学・バイオマテリアルならびに人工臓器学の基礎的・臨床的研究
エネルギー 理工学研究所	上田 静政	附属エネルギー複合機構 研究センター	半導体、半金属におけるホール効果等輸送現象及び、一次元磁性体のスピンギャップと量子振動に関する研究
〃	佐藤 保雄	附属エネルギー複合機構 研究センター	金ナノワイヤーの創製および応用に関する研究
木質科学研究所	則元 京	木質バイオマス研究部門	木質の物性解明とその制御に関する研究
防災研究所	入倉 孝次郎	地震災害研究部門	強震動地震学に関する研究
〃	岡 太郎	附属水資源研究センター	浸透流・地下水文学・内水災害防御論・都市水文システムに関する研究及び洪水・水資源に関する国際共同研究
〃	竹内 篤雄	附属斜面災害研究センター	温度測定による流動地下水調査法に関する研究
ウイルス研究所	香川 和子	生体応答学研究部門	大脳皮質と心臓筋肉に存在する第二のDNA (CO-DNA) に関する研究
原子炉実験所	小林 捷平	原子力基礎工学研究部門	中性子の挙動と核反応データに関する実験的研究
〃	内海 博司	放射線生命科学研究部門	高等動物細胞における電離放射線障害の回復・修復に関する研究
〃	岩本 智之	原子力基礎工学研究部門	大気環境に関する研究
霊長類研究所	目片 文夫	分子生理研究部門	血管平滑筋細胞膜の電気生理学的研究
東南アジア 研究センター	Rambo, Arthur Terry	人間生態相関研究部門	ベトナムにおける文化・社会・環境に関する研究
高等教育研究 開発推進センター	井 街 悠	全学共通教育カリキュラム 企画開発部門	運動中の被験者の動脈波形の無侵襲的連続測定装置の開発とその応用に関する研究
低温物質科学 研究センター	原 公彦	低温物質科学研究部門	高圧・超高圧下における物理化学（相転移、化学反応の動力学、溶液物性）に関する研究
〃	西下 博紹	寒剤供給部	極低温生成に関する低温技術の開発、特に極低温寒剤であるヘリウム液化と供給に関する研究
フィールド科学 教育研究センター	大 畠 誠 一	森林生物圏部門	森林生態系の階層性に注目し、各階層における多様性とシステムの形成維持機構や多様な生物種の生活史の解明

部局の動き

基礎物理学研究所創立50周年記念講演会・式典・祝賀会を挙行

基礎物理学研究所は、12月8日（月）午後2時から京都ブライトンホテルにおいて、創立50周年を記念して講演会・式典祝賀会を、学内外関係者約180名の参加者を得て、開催した。

記念講演会では、研究所創設委員であった南部陽一郎シカゴ大学名誉教授が「素粒子物理学70年の歩み」、また、元所長の佐藤文隆本学名誉教授が「理論物理学の勃興と将来」の演題で講演した。

記念式典では、九後太一所長が式辞の中で、創設から現在までの発展の経緯を述べるとともに研究所の開所精神として「共同利用の精神」を披瀝し、所員一同一層研究に邁進する覚悟であることを披露した。また、尾池和夫副学長が挨拶の中で、我が国で初の全国共同利用研究所として発足した当時の大学の様子を述べた。引き続き、河村建夫文部科学大臣（藤原 誠研究振興局学術機関課長代読）、黒川 清日本学術会議会長（北原和夫学術会議会員・物理学研究連絡委員長代読）、小林 誠高エネルギー加速器研究機構素粒子原子核研究所長、上田和夫東京大学物性研究所長、笹尾 登理学研究科長が来賓祝辞を述べた。

次いで牟田泰三広島大学長、戸塚洋二高エネルギー加速器研究機構長、海部宣男国立天文台長、



式辞を述べる九後所長

David J. Gross 米国サンタバーバラ理論物理学研究所長をはじめ多数の関係者から寄せられた祝電が披露された。

式典終了後祝賀会が開催され、九後所長の挨拶、西島和彦元所長、木村利栄元広島大学理論研究所長のスピーチの後、長岡洋介元所長の発声で乾杯した。参加者の和やかな歓談のなか、伏見康治大阪大学・名古屋大学名誉教授、益川敏英前所長のスピーチがあり、創設時代からそれぞれ研究所に関わられた時代の苦労話や、次の世代へ更なる研究の進展を望む声など盛況のうちに幕を閉じた。



文部科学大臣祝辞を代読する藤原学術機関課長



挨拶する尾池副学長

寸言

気概とたしなみ

安部 浩平



京都に住み、学んだ者ならば誰でも、心のなかに自分だけの「京都」を持っているのではないのでしょうか。昭和21年、旧制高校から学徒出陣を経て、京都帝国大学法学部に入学した私にとっての「京都」は、平和と自由という明るさに彩られ、戦災を免れた日本の美しさの結晶として、くっきりと心のなかに形作られています。

私は、昨年12月に馬齢を重ね満八十歳となりました。そのせいかどうか、最近、人生の「転機」ということについて思いを巡らせることがあります。私の場合、放歌高吟、バンカラ生活を送った旧制高校が、精神的な自立への第一歩だったと思います。そして学徒出陣で軍隊へ入隊。暗く辛い時代ではありましたが、精神と肉体を鍛練し、忍耐力を養うことができました。そして、私だけではなく日本全体の転機ともなった終戦。若くして散っていった友人達のことを思うと、人生の無常を感じざるを得ません。私自身、もう一年戦争が長引けば戦死していたに違いなく、「生き残った者がそれに値する責務を果たさなくては」というある種の使命感を強く持つようになりました。

そして私の人生で最大の転機となったのが京都大学への入学であります。戦死の覚悟を決め、後のことは何も考えていなかった私にとって、まず入学試験が最大の難物です。なにしろ全体主義・軍国主義から民主主義へと180度の転換。ラッセルの「民主主義とは何か」を四苦八苦しつつ読み齧りしたりして、何とか合格することができました。その時の感激は今も忘れられません。入学後もしばらくの間、入学試験の夢を見てはうなされたほどです。

京都での学生生活は、物資も食料もない耐乏生活ではありましたが、美しい自然と温かな人情、そして平和と自由を満喫し、意気軒昂たるものでした。大学では、佐々木、滝川、大隅といった高名な先生

方の警咳に接することができ、誇らしく天にも昇るような気持ちでした。その割に、あまり学業に熱心でなかったのは、今にして思うと忸怩たるものがあるのですが。

人生最良の時とも言える京都大学時代。そこで学んだものはその後の私の人生の骨太なバックボーンとなり私を支えてくれました。ただ、京都で得たものの、学んだものをうまく一言で言い表せる言葉が長年見つけられずにいました。ずっと後年になって作家の城山三郎氏と対談した折り、氏のリーダーシップ論である、「気概とたしなみ」という言葉に触れ、大いに共感するものがありました。そして同時に、京都で私が学んだものは、この「気概とたしなみ」ではなかったかと思ひあたったのです。京都大学時代、貧しく無知ではありましたが、「これからの日本を創るのは俺達だ」「天下に我あり」という気概にだけは満ちあふれていました。また、歪んだ特権意識とは全く異なる良い意味での「エリート意識」「使命感」も同時に身につけることができたように思います。

今、日本は社会・経済全般の構造変革の途上にあり、大変難しい局面を迎えています。日本の将来に対する悲観論もあちらこちらで語られています。しかし、私は全く悲観していません。戦後の焼け野原から今日の繁栄を築いたエネルギーは、今の若い人たちのなかにもしっかりと脈打っているはずですよ。私は、「気概とたしなみ」を備えた若者達が日本の未来を切り拓いていってくれることを確信しております。そしてその若者達のなかで、それぞれの「京都」を心に秘めた京都大学出身の方々がひとときわ輝きを放ち、大いに活躍していただくことを期待しております。

(あべ こうへい 中部電力(株)相談役 昭和24年法学部卒)

随想

京都大学を想う

名誉教授 志田 忠正

今年¹⁾は新渡戸稲造の没後70年にあたる。そこで書店に平積みされている「武士道」を買って通勤の電車の中で一読した。ふと気がつく、目の前の席の若い外国人も原版の Bushido, The Soul of Japan を読んでいた。しかし、



私の周りの若者に新渡戸のことを聞いても、5千円札の肖像の人と答えるのがせいぜいである。二十世紀の初頭、多くの国の言葉に訳され、版を重ねた書物が今一度、日本の若者にも読まれることを望む。

ここで「武士道」を持ち出したのは、「武士は金銭そのものを卑しむ…、教育において第一に重んじられたのは、品性を確立することであった…」というくだりを紹介したかったからである。しかし、武士は農、工、商に携わる人々の経済に支えられておきながら、衣食足りて礼節を知るという教えにも便乗しているのだから、私の意図は、単に武士の美德を礼賛しようというものでないことは勿論である。

実は、読者に紹介したい記事がもう一つある：米国化学会誌の編集長を20年にわたって務めた Allen J. Bard 教授が C&EN 誌の2002年4月8日号で次のように述べている。More and more, professors at some universities are judged not on the quality of their research, but rather on the amount of research funds they have raised.---The simplest fact is that university chemists are spending too much of their time raising money.---Some claim they spend 70% of their time on fund-raising, and if this is so, it is a deplorable situation.

Bard 教授は、さらに続けて、scientists are continually seeking new programs and sources of support.---という状況を憂いた上で、The most important new ideas will almost always come from some individual investigators working in isolation and not from a committee. --- History has demonstrated time and again that fundamental research pays off in ways that cannot be imagined

in the beginning. It takes a very long time to take a fundamental research finding and develop it into a useful application. と述べている。この後半部分は、まさに小柴昌俊先生の世界である。

上の Bard 教授の記事は最近、京都でお目にかかった畏敬する先輩、岡 武史シカゴ大学教授から教わったものである。本稿の執筆依頼を受けて以来、私がぼんやりと考えてきたことをずばりと表現しているので、ここに全面的に受け売りする次第である。

さて、表題の京都大学であるが、まずは、本学が Bard 教授のいう some universities に含まれないことを切に祈る。とはいえ、必要な金は必要であるし、武士は喰わねど高楊枝…、と手をこまねいては、4月からスタートするサバイバルレースに取り残されること必定であろう。しかし、本学が金集め競争に血眼になることなしに、生き抜く術はあると私は思う。その基本は、平凡ではあるが京大を目指す若者の心をとらえることである。そのためには、1に教官諸氏が品性、実力をいやが上にも高めて、新渡戸のように国際的な場においても人々の信を得ることを目指すこと、2に京大生活の環境をよくすることである。1についてはいわずもがなである。そこで、2についてとりとめないことを述べる。

今から4、50年も前、東京での私の下宿を訪れた京大生が私の本棚を一瞥して吐いた寸言は、「なんと寒々した風景だ。まるで、小社会人の世界だな。」であった。私の本棚は、成績を上げるのには効率のよい書物が目立ったからである。後日、今度は私が吉田山山腹の彼の下宿を訪れたとき、寸言の意味するところが身にしみて実感された。そして、「金がないときは、壁に向かって座禅するよ。」と云う彼の一言に止めを刺された。しかし、銀閣寺近くにまだ点在していた農家の軒先のコスモスの花は心をなごませてくれた。その後、私はアメリカの大学で2年ほど過ごしたが、ここでもちょっとしたカルチャーショックを受けた。それは、胸に Arborist と書いたバッジをつけた職員がキャンパスの一本一本の樹々を看着回る光景であった。美しい緑のお陰で私の研究効率も少しは上がったと思う。

さて、手狭な左京区キャンパスにも私にはお気に入りのスポットがある。それは農学部のグラウンドである。学生諸君の練習がないときを見計らってグラウンドに立つ。左手の比叡山、右手の紫明岳（左大文字）がまるで両手を広げて私を迎えてくれるかのようなのである。目の前の哲学の道とグラウンドとの段差を生んだ活断層の跡は地球の営みの雄大さを実感させる。グラウンドの西北端の亭々たるドイツ柏は、新渡戸の没年、ベルリンオリンピックで本学の田島直人、原田正夫両選手が三段跳びで世界新記録の金、銀賞に輝いたことを教える。そして、心の耳を澄ますと、足下からは昭和18年11月20日、京都帝国大学学生出陣壮行式で響かせた先輩諸氏の足音が聞こえてくる。最近、新装なった百周年時計台記念館の迎賓室（元の総長室）に飾られている須田国太郎描くところのこのときの油絵は、レプリカでもよいから多くの人々の目に触れるようにと願う。本学出身の須田画伯は、深い精神性を宿した暗黒調の作品で知られるが、その黒を基調とした画面に描かれた銃剣の先の僅かな赤と緑の布切れは、私にはそれぞれ、流さずとも済んだ若き血潮と、失われた青春の夢の象徴に映る。

4月から国立大学法人になるとは云っても相変わらず、国民の税金に拠ることに変わりはない。そのかわり、accountabilityという義務を背負うことになるからこれまで以上に1円の無駄遣いも許されない。また、自助努力の名の下に教育・研究の場で“武士”の経済を目指すのであれば、何のための経済であるかということを常に自問し続けなければならない。つい先ごろまではタブーであった産学協同が推奨されるのは一種の進化なのだろうが、私には経済についてこれ以上、語る資格はないので環境の話に戻る。

いまさら、キャンパスの狭さを嘆いても意味はない。そこで、眼を少しキャンパスの外に向ける。大学から歩いて10分足らずの範囲の中に仏、伊、独、英²⁾、諸国の出先の機関が集まっているところは日本中で京大以外にどれくらいあるだろうか。京大がこれらの拠点とゆるやかに手を組むことで世間、すなわち、世界とのパイプを太くする手立てはなかろうか。³⁾ もっと身近な“歴史ある”西部講堂周辺の空間も、世（界）の人々の誰が見ても分かる姿にす

るべきである。なにしろ、ユカワ、トモナガの名や60年安保、70年安保のことも通じなくなりつつある時代である。また、百万遍にある西園寺公望の庭や、お札の肖像の先輩である岩倉具視の旧跡などなども明治維新が何であったかを国内外の若者に伝える教材になり得る。京大を訪れた人がいやでも目にする吉田神社をはじめとして吉田山、東山あたりの神社仏閣とも仲良く付き合うことはできないものだろうか。宗教法人とはどうも…などと尻込みせずに、これからはお互い、法人同士になる間柄である。市中にある1000を超える神社仏閣はいにしへの大学といえなくもないのだから。留学生や海外からの来客が京大を通してこれらの文化を理解できたら、と思うのも現役時代に日本の歴史や社寺の説明がろくにできなかった悔いが残るからである。赤レンガの威圧的な塀で囲われたよその大学と違って、京大医学部は外塀を取り除いて青空を広くした実績をもつ。このようにして京大が徐々に京都の街に溶け込めたと夢見る。

ともあれ、新渡戸没後、初の理学部出身総長となられた尾池総長は新しいアカデミズムの旗手として、また、ときに応じて官・学、叡智を比べあう場でのリーダーとして、Bard教授が指摘する米国の轍を踏むことのない舵取り役を果たされるよう切望する。

- 1) 文頭の「今年」は2003年のこと。
- 2) 北白川にあったBritish Councilは3～4年前、都心へ移ったが若い人なら歩いてでも行ける距離。
- 3) 本文で述べたパイプの一つ；最近、百万遍の京大総合博物館に垢抜けした垂れ幕が掛かっているのに気付いた。関西日仏学館、京大、パリ国立近代美術館などが主催するロラン・バルトのデッサン展「色の音楽・手の幸福」の案内である。2月15日までの会期中には是非、訪れたいと思った。本文で述べたパイプの一つを、先ずはこのような展示会の形で実現された主催者の方々へ全幅の敬意を表す。おりしも、新聞は「ロラン・バルト著作集」全十巻の刊行が始まったことを報じている。多くの大学が客引きまがいの入学案内を競う中、このような試みは必ずや感受性豊かな若者の心をとらえるものと思う。京大が大学の存在意義を、世の中、特に全国の高校生に知らしめるべく、“広報”されることを期待する。

（しだ ただまさ 元理学研究科教授、平成11年退官、専門は分子分光化学を主とする物理化学）

洛書

「上海センター」に、職員組合に

大西 広

現在、私の脳髓の半分は経済学研究科内に設置された「上海センター」に占拠され、もう片方は京都大学職員組合のことで占拠されている。前者では事務局長として立ち上げのための外部資金獲得と産学連携に奔走し、後者では中央執行委員長として法人化に伴う様々な交渉や組合員拡大運動で大忙しである。おかげで机に向かってゆっくり勉強できるような時間はない。が、そのこと以上にここで申し上げたいことは、産学連携と「組合」という一見相反する事柄を同一人格が同時に遂行することの妙味である。これもなかなか悪くないというのが率直な感想である。



ところで、この「上海センター」とは全国の国立大学では初めて上海に事務所を設置し、定点観測を含む現代中国研究の拠点としようというものである。昨今中国研究の重要性が高まる中、他大学に先駆けたこの事業に大変やり甲斐を感じている。ここで集めた資金を使って何人の研究者を中国に送り込めるか、どんな中国研究を発展させていただけるか本当に楽しみにしている。

もちろん、企業への依頼活動は本来の「学者の仕事」ではなく、つらいところがある。企業側の当該部局に趣旨を説明して社長や部長との面会の約束をとる、そしてさらにこちら側の研究科長などとの日程を調整して本社を訪問する。その作業だけでも相当に大変な上に、ようやく訪問してもときに断られる。実は最初の訪問先で断われ、これからどうなることやらと途方に暮れたこともあった。が、この事業の重要性を考えると、ひるむ訳にはいかない。

が、もちろん、この上海センターでの活動の重点が現在資金集めにあることによる特異性もある。こうした外部資金依存の「センター」が作られることは「法人化」の一つの帰結と理解されるし、依頼先企業を中心に大企業にあることをもって「それが法

人化を強行した政府の目的であった」との批判もありうるだろう。しかし、それでも、大学が産業界と「連携」すること自体を否定することはできないし、また我々の自覚さえあれば、この「連携」を「癒着」にしないことは可能だからである。

実際、私はこの分野の研究を始めるようになって京都の多くの中小企業家との接点を持つようになった。その多くは、あまりにも小さな企業で大学としての資金依頼の対象とはならないものの、中国事業を推進中の企業をウォッチすることはそれ自体が我々の研究になっている。だから、これら多くの中小企業から資金提供が得られないからといって我々が彼らと疎遠になるのであれば、それは我々の研究自体を阻害するばかりか、先の批判にまともに向き合えなくなるであろう。我々「国立大学」はやはり「社会の公器」であって、その自覚を失うことは許されない。我々の進める産学連携も無条件的なものではなく、大学の内外から何らかのチェックを受けることもありうるだろう。この意味で、職員組合などがときに警鐘を発するようなことはむしろ健康的な事柄であると思うのである。

がしかし、ここで述べたいことの中心は、そのどちらにしても京都大学の不可欠な一部であり、大学行政に活躍の同僚たちも、職員組合で活動の皆さんも未来の京都大学のために一生懸命であるということである。実をいうと、職員組合本部事務所には半世紀前、組合設立当時の資料が壁に貼られているが、当時はスト中止の警告を総長から受けるなど「労使関係」は厳しかった。が、半世紀の時代を経て迫り来る「法人化」の下では毎年3%マイナスと伝えられる運営費交付金問題への対処など、一致団結した行動の求められる時代が来ているように思われる。12月17日、尾池新総長は職組本部にも就任のご挨拶に来てくださったが、これまでとは異なる良好な労使関係を築くご意志と受け止めている。期待に是非応えたい。

(おおにし ひろし 経済学研究科教授)

訃報

このたび、^{おかむらけん じろう}岡村健二郎名誉教授、^{しげぞわかず お}繁澤和夫名誉教授、^{すがいしゅういち}須貝脩一名誉教授が逝去されました。ここに、謹んで哀悼の意を表します。以下に各名誉教授の略歴、業績等を紹介いたします。

岡村 健二郎 名誉教授



岡村健二郎先生は、平成15年11月8日逝去された。享年79。

先生は、昭和24年京都大学工学部機械工学科を卒業後、同大学院で学ばれ、同大学工学部講師、助教授を経て、同37年教授に就任された。昭和63年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。本学退官後は、昭和63年より平

成7年まで中部大学教授を務められた。

先生は、生産工学の領域で基礎から応用にわたる幅広い研究を展開された。特に、研削工学における研削現象の解明と難削材用研削砥石の研究についての一連の研究は高く評価され、米国 SME (Society of Mechanical Engineers) の国際賞を受賞された。

また、日本機械学会副会長、精密工学会副会長等の要職を歴任された。

(大学院工学研究科)

繁澤 和夫 名誉教授



繁澤和夫先生は、平成15年11月15日逝去された。享年84。

先生は、昭和19年京都帝国大学理学部を卒業後、同大学院で学ばれた後、同21年商工会（後に通商産業省工業技術院）陶磁器試験所常勤嘱託、通商産業技官、大阪陶業株式会社、滋賀大学学芸学部助教授、京都大学教養部助教授を経て、同45年教授に就任された。同58年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。

本学退官後は、昭和63年から平成2年まで大阪学

院大学教授として引き続き教鞭をとられた。

先生の専門は鉱物学で、主に分析化学、地球化学の手法を用いて研究を行い、造岩鉱物が風化作用により最終的に粘土鉱物となり陶磁器原料として用いられる一連の過程の研究や、生物殻として生成される炭酸塩鉱物と微量元素の関係の研究について優れた業績を残された。

在任中は、京都大学評議員及び教養部長として大学の管理運営に貢献された。

これら一連の功績により、平成5年4月勲三等旭日章を受けられた。

(大学院人間・環境学研究科)

須貝 脩一 名誉教授



須貝脩一先生は、平成15年12月24日逝去された。享年92。

先生は、昭和8年京都帝国大学法学部を卒業、同大学法学部助手、同助教授を経て、同22年教授に就任、行政法講座、租税法講座を担当された。昭和49年に停年退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。

この間、昭和33年から35年まで評議員を務められ、大学の管理運営に貢献された。本学退官後は、昭和49年から4年間は京都産業大学教授、同51年から53年まで同大学法学部長を務められた後、同53年からは7年間名城大学教授を務められた。

先生は、行政法のみならず、戦後本格的に発展した税法をも研究の対象とされた。いずれについても、豊かな比較法的知見、柔軟な思考、そして事物の本質に対する鋭い洞察力をもって法制度・法理論の本質を深く究明され、行政法学および税法の発展に多大の貢献をされた。特に創生期にあった税法に対する貢献は大なるものがある。

また、先生は、日本税法学会において税法の確立のために指導的役割を果たされ、顧問を務められた。

これら一連の研究教育活動により、昭和58年11月勲二等瑞宝章を受けられた。

(大学院法学研究科)

お知らせ

総合博物館展示会のご案内

特別展「色の音楽・手の幸福ーロラン・バルトのデッサン展ー」

ロラン・バルトは作家、哲学者、思想家として世界的にそのエクリチュールが知られていますが、デッサンも多数残っています。国立ジョルジュ・ポンピドゥー芸術文化センターが最近一般に公開し、話題となったこれらのデッサンが今回初めて来日し、東京と京都で展示されます。バルトのデッサンに出会う貴重な機会をどうぞお見逃しなく。

会 期：1月14日（水）～2月15日（日）

主 催：京都大学、関西日仏学館、国立ジョルジュ・ポンピドゥー
芸術文化センター＝パリ国立近代美術館、東京日仏学院、
東京大学総合文化研究科・教養学部

会 場：総合博物館 第2企画展示室（南棟2F）

【総合博物館入館案内】

開館時間：午前9時30分～午後4時30分（入館は午後4時まで）

休 館 日：月・火曜日



京都大学21世紀 COE「知識社会基盤構築のための情報学拠点形成」の 成果報告と第1回国際会議

'International Conference on Informatics Research for Development of Knowledge Society Infrastructure 2004'

日 程：3月1日（月）～3月3日（水）

場 所：京都大学百周年時計台記念館大ホール

講演プログラム：

3月1日（月） -- 成果報告シンポジウム

13：30-14：30 招待講演 慶應義塾長 安西 祐一郎

14：30-15：20 対談「情報学と情報知識社会」

前総長 長尾 真, 慶應義塾長 安西 祐一郎

15：30-17：30 本 COE プログラム成果の概要

18：00-20：00 国際会議レセプション 人数に制限があります

3月2日（火）～3月3日（水） -- 国際会議

COEの外国人顧問を迎え、本プログラムの主要成果発表を行う

*詳細は URL < <http://i.coe21.kyoto-u.ac.jp/conference/> > をご覧下さい。

受 講 料：無料

定 員：250名

申 込 先：上記 URL にてお申し込みいただけます。

問い合わせ先：京都大学21世紀 COE

「知識社会基盤構築のための情報学拠点形成」事務局 江畑

FAX：753-4970 E-mail：adm@i.coe21.kyoto-u.ac.jp

主 催：京都大学21世紀 COE「知識社会基盤構築のための情報学拠点形成」

日誌 2003.11.1 ～ 11.30

11月4日 中国 Chen Jia'er 国家自然科学基金委
員会主任 他2名来学, 総長他と懇談

6日 京都大学仙台地域講演会

10日 学生部委員会

14日 入学者選抜方法研究委員会

18日 評議会

〃 全学情報セキュリティ委員会

18日 台湾 Yuan T. Lee 中央研究院院長, 原
子・分子科学研究所所長 来学, 総長他
と懇談

19日 国際交流委員会

20日 11月祭 (24日まで)

21日 大学入試センター試験実施委員会

25日 厚生補導担当教官研究会 (26日まで)

医療技術短期大学部の動き

恒例の消防訓練を実施

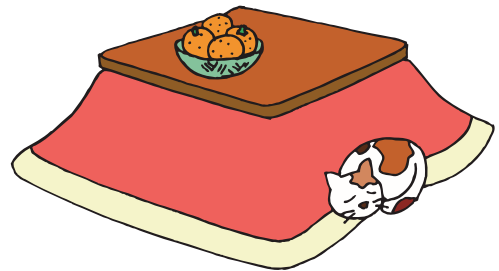
医学部保健学科・医療技術短期大学部は、恒例の消防訓練を平成15年11月25日（火）に左京消防署の指導と協力を得て実施した。

訓練内容は、北棟4階微生物血清実習室から出火したと想定し、京都市消防指令センターへの通報訓練・館内放送訓練・消火器による初期消火訓練・屋内消火栓による放水訓練及び逃げ遅れた学生の避難誘導訓練を実施した。

引き続き避難梯子による訓練及び中庭にて学生を中心にした消火器放水訓練を行った後、1階第2大講義室にて初期消火の心構えについてのビデオ鑑賞を行い、左京消防署員による災害弱者の多数いる病院等にこれから勤務する学生へのメッセージを含む講評を受け、自衛消防隊長笹田昌孝部長の挨拶を



もって終了した。訓練に参加した者は、11月祭の最中であるが、訓練に駆けつけてくれた学生が約50名と教職員合わせて約70名であった



編集後記

僕にとって広報委員の仕事は大変難しい。広報委員の第一の仕事は掲載文章の校正だ。文章に対する集中力がある。いつの頃からか、読み飛ばしながら大意で満足する癖がついてしまっていたようだ。ネットワーク環境の発達の間からか、文章を読む量が大きく増えた気がする。毎日洪水のように出るプレプリント、ネット新聞、必要の薄いメール。そのほとんどはざっと見るだけで済ませてしまう。文章をじっくり読みながら、あれこれと考えるようなことはしない。一方、広報委員の仕事はその対極のことを要求する。漢字や文法の間違ひはもちろん、もっと分かりやすくないか、誤解を生じないようにカンマやハイフンまで検討する。広報委員は、読み方の基本を学んでいるようで楽しい。

(笹倉記)